

# 清末の英語學——鄭其照とその著作

高田時雄

## 緒言

長期にわたり世界文化の中心を以て任じてきた中國のような國が、はじめて外國に門戸を開き、對等の關係を基礎として外交通商に従事せざるを得なくなったとき、最も必要とされたものは英語を能くする人材であった。清朝政府は遅ればせながら同治元年（1862）に京師同文館を、翌同治二年（1863）上海に廣方言館を、更に同治三年には廣東同文館を設置して、英語などの外國語及び各種西學を教授し、洋務に攜わる語學に通じた人材の育成に取り組んだ<sup>1</sup>。このような官立の學校で學んだ學生はやがて外交を初めとする國際舞臺で活躍することになるが、それ以前から中國では英語に長けた人材が存在しなかったわけではない。とりわけ廣東の沿海部一帯では、様々なレベルで外國人との應接を必要としたから、社會の各層に見合った英語學習が行われていた。買辦商人や外國商館に雇用される人物など、日常的に外國人とつきあう機會がある人々は多かれ少なかれ一種の英語を話したのである。やがて上海界限に移植され「洋涇浜英語」と呼ばれるようになるピジン・イングリッシュがその言語であるが、廣州ではその言語を自習するための冊子さえも盛んに出版されていた。清末の中國に行われた英語なるものの實態はたいていこのレベルのものであったと想像される。これも一種の英語學と呼ぶことは不可能ではないが、しかし正しい意味での英語學というには些か躊躇されるであろう。しかし正しい本格的な英語に習熟し、中國人に正確な英語を學習させるべく、辭書や教材の編纂に力を盡くすべき人物の出現もまた時代の要請であったといえる。その役割を主體的に擔い、大きな足跡を残した人物に鄭其照がいる。彼こそは中國英語學の開祖と言っても過言ではない。小文では鄭其照の人物とその英語學について概述してみたいと思う。

## 一、略傳

鄭其照についてはこれまでほとんど注目されて來なかつたが、ここ十年來、中國人の手になる最初の英漢辭書の編者として次第に注目を浴びるようになって

---

<sup>1</sup> これらの學校については、蘇精『清季同文館及其師生』（民國七十四年（1985）、私家版）がもっとも詳しい。

てきた<sup>2</sup>。しかしその傳については不明な点が多く、生卒年さえも確かな根據によつて示されていないのが現状である。ここでは限られた信頼し得る材料に基づき、その生涯をたどっておきたい。推測の域をでないものもあるが、多くは明白な事實からの推論であり、さして大きな過誤はないものとする。

鄭其照の前半生について最も確かな事實を伝えるものは、現在カリフォルニア大學のバンククロフト圖書館に所藏される、バンククロフト (Hubert Howe Bancroft, 1832-1918)<sup>3</sup>の鄭其照に対するインタビュー記録である<sup>4</sup>。バンククロフトの質問に對して鄭其照が答えるという形での問答が六頁にわたつて記録されている。インタビューが實施されたのは一八八三年一月九日、鄭其照が該圖書館を訪問したときのことであつた。なにしろ自ら語る事實であるから、この時點より以前の鄭其照の經歷を知る上では第一級の資料と言へる。

鄭其照は道光十六年 (1836) 廣東省新寧縣で生まれた<sup>5</sup>。字は容階 (蓉階)、初名を全福と云つた。新寧は民國になつてから臺山と改稱されたが、華僑の故郷として著名な土地である。香港の官立學校で教育を受け、卒業後は豫備學校の校長をつとめた<sup>6</sup>。ここに官立學校 (Government School) というのはまた「皇家書館」とも稱され、1854年、それまで教會に委ねられていた教育を香港政廳が直接に管轄すべく設立されたものである<sup>7</sup>。1841年に香港が正式に開埠されて以降、キリスト教の布教團體はこの地に相次いで學校を設け、教育事業に乗り

---

<sup>2</sup> 内田慶市「鄭其照の『華英字典集成』をめぐつて」『關西大學中國文學會紀要』第十九號、平成十年三月、1-17頁。後、同氏の『近代における東西言語文化接觸の研究』(關西大學東西學術研究所研究叢刊十七)、關西大學出版部、平成十三年十月、その227-240頁に再録。宮田和子「鄭其照『字典集成』の系譜」『中國研究月報』Vol. 52, No. 5 (No. 603) (=1998年5月號)、30-41頁。最初に鄭其照の英語學を取り上げたのはむしろ日本の研究者であり、その後次第に中國人學者の注目するところとなつた。

<sup>3</sup> バンクロフトはカリフォルニアの地方史家で、書店經營及び出版業も手がけた。厩大な歴史資料の集積であるバンククロフト・コレクションは1905年カリフォルニア大學に歸し、パークレー校バンククロフト圖書館の基礎を形作つた。

<sup>4</sup> BANC MSS P-N 2: Kwong Ki Chiu "The Chinese in America". 以下引用に際してはインタビュー (Interview) とする。ちなみに鄭其照の英文綴りは、Kwong Ki Chiu が正しく、鄭其照自身もこれを用いているが、容階の自傳 *My Life in China and America* などでは Kwang Kee Cheu と官話風に綴られている。

<sup>5</sup> "I was born in the district of Sun Ning, Canton Province, China in the year 1836" (Interview). Sun Ning は言うまでもなく「新寧」を粵語音で標記したものである。ネット上などで道光 23 年 (1843) に生まれたとする説を見かけることもあるが (<http://www.fangcun.gov.cn/net/wet10/web/mingren.htm> 「聚龍村名人鄭其照」)、典據は不明。高永偉「鄭其照和他的《英語短語詞典》」『辭書研究』2005年第3輯(總第151)159頁は正しく1836年廣東新寧生まれとするが、これはインタビュー記事に據つたものであろう。ただ新寧を「即現在的廣州市芳村區聚龍村」とするのは誤解に基づく。

<sup>6</sup> "I was educated in the English Government School of Hong Kong and afterwards I was principal of the preparing school (Interview)."

<sup>7</sup> 王齊樂『香港中文教育發展史』1983年、香港：波文書局、126頁以下。

出した。なかでもマカオですでに実績を挙げている馬禮遜書塾 (Morrison School) は、1842年に香港に移轉してきた学校で、香港における学校の先駆けであった。当初は香港政廳からの援助により、順調な運営を行うことができたが、やがて政廳との関係に圓滑を缺くようになり、1850年、閉校に追い込まれる<sup>8</sup>。この学校で學んだ人物に有名な容閔 (1828-1912) がいる<sup>9</sup>。鄭其照の就學期には、香港の教育の中心はすでに官立學校に移っていた。彼が何歳でこの學校に入學し、どれだけの期間教育を受けたかは明かではない。しかしここで確固たる英語の基礎を築いたことは間違いない。ちなみにドイツ人宣教師ロプシャイト (羅存德、Wilhelm Lobscheid、1822-?) は一八五七年五月十二日に香港政廳の視學官 (government inspector of schools) に任命されている<sup>10</sup>。後年『英華字典』 (*English and Chinese Dictionary*, 4 vols., 1866-1869) の編者として著名なこの人物に、鄭其照が接觸する機会があったか否かはやはり明かでない。もし接點があったとすれば、鄭其照が英漢辭書の編纂を思い立つ上で何らかの刺激をえたということも十分に考えられるが、当面は想像の域を出ない。

さて1870年になり容閔の建議が實って、アメリカへ留學生を派遣する制度が設けられることになった。そして1872年にはいよいよその第一回の留學生、といっても十歳から十六歳までの子供たちであるが、彼らは上海で一年間の豫備教育を受けたのち、アメリカに旅立って行った。上に鄭其照が豫備學校の校長であったというのは、この留學生の豫備教育を擔當していたのである<sup>11</sup>。当初、毎年三十名を四年間にわたって送り出す計畫であり、これがその最初であった。アメリカ東部のコネチカット州ハートフォード (Hartford, Connecticut) に置かれることになる選帶幼童出洋肄業局 (Chinese Educational Mission) は容閔

---

<sup>8</sup> 王齊樂同上書、94頁以下。

<sup>9</sup> 『西學東漸記——容閔自傳』 (東洋文庫 136)、百瀬弘譯註、東京：平凡社、昭和四十四年、第二章 (16頁以下)。Yung Wing, *My Life in China and America*, New York: Henry Holt and Co., 1909, Chapter II (p. 13ff.)

<sup>10</sup> 王齊樂同上書、122頁。ロプシャイトの傳については、那須雅之「W. Lobscheid 小傳——《英華字典》無序本とは何か」『愛知大學文學論叢』第109輯、平成七年 (1995) に詳しい。この論文には1857年5月12日の視學官任命に言及するほか、別の箇所ではまた「1852年4月ロプシャイトは、イギリス政府の命により香港における Government school の Inspector (學校長) に任ぜられ」といい (227頁)、また「翌1853年2月18日香港へ到着すると、ロプシャイトはさっそく Government school の校長に就任する」ともいわれている。もしそうだとすると鄭其照とロプシャイトの接觸可能性はより高くなる。

<sup>11</sup> 著作の項でも述べるが、鄭其照の『英語彙腋初集』の自序に「始讀書於香海、繼授書於滬江」というのがそれを指しているのであろう。

(純甫)と陳蘭彬(荔秋)が監督に任じ<sup>12</sup>、中文教習として葉源濬(樹東<sup>13</sup>)、容増祥(元甫)が同行し、曾恒忠(蘭生)が通譯を務めた。鄭其照がこのミッションに關與するのはその第三回(1874)であり、留學生を引率してアメリカに行くことになった。彼にとって最初の外國旅行である。時に鄭其照三十八歳、かなり遅い外國經驗と言ってよい。しかし鄭其照はすでに1868年、彼自身の手になる最初の辭書『字典集成』を出版しており、英學に對する意氣込みは盛んなものがあった筈である。これについては後文で觸れよう。

第三回の引率監督は祁兆熙(?-1891)、鄭其照はその補佐として同行したのである。もちろんその英語力を買われてのことであつたのはもちろんである<sup>14</sup>。幸いに祁兆熙はこの時の旅行記を残してくれているので、それによって鄭其照の最初の洋行について知ることができる<sup>15</sup>。八月十日上海を出帆、十二日に長崎へ入港、さらに神戸を経て十七日に横濱に着いた。そこからサンフランシスコ汽船會社の「日本」(Japan)號に乗り替え、アメリカに向つた。出帆は二十日朝七時。四千五百噸の「日本」號の乗客たちは、途中惡天候と船酔いに苦しみながら、九月十三日無事サンフランシスコに着いた。サンフランシスコには廣東出身の同郷人が多く<sup>16</sup>、鄭其照の一族も何人かいて、彼らの款待に日を過ごした様子が知られる。同二十日、サンフランシスコを後にして、汽車で出發、二十七日の朝ようやく目的地のスプリングフィールドに到着した。ミッションの本部はハートフォードにあつたが、ここスプリングフィールドには留學生を各地に分配するためのセンターが置かれていた<sup>17</sup>。三十日には留學生たちの落착き先も決まり、彼らを送り出してしまったので、引率監督の祁兆熙はハートフォードの本部に移動した。ところがこの日、鄭其照は甥っ子(姪)を訪ねていて、彼と行を共にせず遅れて合流したことが記されている<sup>18</sup>。この姪というのはおそらく第一回の出洋ですでに渡米していた鄭榮光ではあるまいかと思われ

---

<sup>12</sup> 進士出身であつた陳蘭彬は常に容閔の上席に置かれたうえ、教育に對する考え方の相異から、兩者の關係はうまくいかなかつた。このあたりは容閔自身が詳しく語っている。『西學東漸記』を參照。

<sup>13</sup> ミッションの構成人員の氏名は『西學東漸記』によつたが、葉源濬の字については後掲『游美洲日記』によつて緒東から樹東に改めた。

<sup>14</sup> “and came to this country in the year 1874 with the 30 Chinese students. I was appointed by the government as one of the two guardians (Interview).

<sup>15</sup> 祁兆熙『游美洲日記』、1985年、長沙：岳麓書社刊『走向世界叢書』本。その211-154頁。

<sup>16</sup> インタビューの中で、鄭其照はアメリカには鄭氏一族が七、八〇〇人ほど居ると言明している。

<sup>17</sup> 『西學東漸記』175頁；*My Life in China and America*, p. 189.

<sup>18</sup> 祁兆熙『游美洲日記』236頁、「鄭容階後至、因訪姪稽遲也」。

る。第一回留學生名簿中<sup>19</sup>に「鄭榮光、廣東新寧縣、年十歳、癸亥」と見える人物がそれであろう。

鄭其照は上海を出発する時、留學生を無事アメリカに送り届けた暁には、祁兆熙と一緒に他の國に廻る約束をしていたらしいが、祁兆熙は事情があつて同行できなくなった。そこで鄭其照は十月六日、單身ワシントンに出て、そこからイギリスに向かった<sup>20</sup>。

やがてイギリスを経て歸國したであろう鄭其照は、翌年（1875）最後の第四回留學生派遣の引率監督として再度アメリカに渡ることになる<sup>21</sup>。この第四回の留學生中には鄭其照一族の子弟と思われる炳光（廣東新寧縣年十三歳癸亥）、國光（廣東新寧縣年十三歳癸亥）の二人が含まれているが、これは鄭其照の強い推薦によるものであるに違いない。彼らはともに光字輩の十三歳である。先に觸れた第一回の留學生鄭榮光も同じく光字輩であり、第一回出洋時の年齢が十歳とすれば、この時點ではやはり十三歳の筈で、かれらはみな同年齡ということになる。炳光、國光のうち一人が鄭其照自身の子である可能性もなくはないが、よく分からない。少なくとも鄭其照には翰光という子があつたことが知られるのみである<sup>22</sup>。この年、鄭其照は出發に先立って、『字典集成』の改訂版を香港から出版している。

いずれにせよ今回は留學生の引率後も歸國せず、アメリカに留まり、教育ミッションのスタッフとして活動することとなる。その後、兩親の喪に服して職務を離れ、もっぱら著作に没頭することになるが、ミッションで働いたのが三年半、その後バンククロフトのインタビューに應じた 1883 年 1 月までが約四年という<sup>23</sup>。第四回留學生派遣が 1875 年 9 月だから、合計七年半ほどの滞在年数は

---

<sup>19</sup> 徐潤『徐愚齋自敘年譜』民國十六年香山徐氏排印本、第十七葉裏。

<sup>20</sup> 祁兆熙『游美洲日記』241 頁、「十月六日乙亥、禮六……午飯後容階至美京、一點鐘乘車往、由此轉抵英國」。

<sup>21</sup> “After that I was reappointed as one of the guardians of the fourth lot of 30 Chinese students coming to this country at the same time I was appointed secretary & translator of the Chinese Dictionary Commission in the U.S.” (Interview). 最後の Chinese Dictionary Commission は Chinese Educational Mission でなければならず、明らかにインタビューの記録者による間違いである。

<sup>22</sup> 後年の改訂版『華英字典集成』に附載される「雜字撮要」には光緒壬寅年（1902）の鄭翰光の序文がついており、そこに「先君蓉階所著華英字典」とあるので、この人物が鄭其照の息であると分かる。ところが「聚龍村名人鄭其照」に據れば、鄭其照には六子あり、順に敬文、敬昆、雅敬、（四子光燧早逝）、敬濤、敬紹だという。この一文の參考資料には『鄭氏族譜』も挙げられており、これらの名が『族譜』から得られたものとすれば、一概には否定し去るわけにもいかない。とすれば鄭翰光というのは鄭敬文と同一人物であろうか。

<sup>23</sup> “I served the government three years and a half in Hartford, Connecticut & after that time my father and mother died. According to Chinese customs an official cannot

よく事實に符合する。鄭其照の英語學関連著作は彼のアメリカ滞在後半期に集中的に作られ、1881、1882年にかけて續々完成する。また鄭其照がイエール大學の卒業であるとする説があるが<sup>24</sup>、筆者は確認し得ていない。もし彼がイエールで學んだとすれば、おそらく服喪中のことであつたと思われる。ただしミッションの仕事に離れた後も、鄭其照は引き続きハートフォードに住んでいたらしい<sup>25</sup>。

鄭其照がアメリカから歸國した正確な時期は不明である。インタビューの最後に「今すぐにも中國に歸るつもりがあるか」と聞かれた鄭其照は、歸國するかどうかははっきりとは分からない。書物の仕上げにかかっているので、中國でやらせている漢字の版下が送り返されてきたあと、好い仕事があれば歸るかも知れないが、それも状況次第だ、と答えている<sup>26</sup>。書物とは『華英字典集成』の第三版のことで、この辭書は1887年によく出版された。

歸國後の鄭其照はその英語力を買われ、兩廣總督張之洞の招きで總督府の總文案に任じ、光緒十五年（1889）張之洞が湖廣總督に轉じるまでその職にあつたとされる<sup>27</sup>。張之洞が兩廣總督に補せられるのは光緒十年（1884）であるから、早ければ、バンククロフトのインタビューを受けてのち、一年餘りのちに歸國したことになる。光緒十二年（1886）には廣州で『廣報』という新聞の發行を開始する。これは中國人自身の刊行になる中文新聞としては最初の試みとして、

---

hold office when he is mourning. I resigned my position & devoted all my time to my literary work from then until now. Nearly 4 years.” (Interview).

<sup>24</sup> Henry S. Colin and Harvey Gee, “NO, NO, NO, NO!”: Three Sons of Connecticut Who Opposed the Chinese Exclusion Acts, *Connecticut Public Interest Law Journal*, University of Connecticut School of Law, Year 2003, Paper 5, p.10

<sup>25</sup> 『英文成語字典』巻頭に掲げられた多くの推薦辭のなかに、宛先を Mr. Kwong Ki Chiu, Sumner Street とするものがあり、この推薦文の書かれた1880年12月には鄭其照が確かにハートフォードのサムナー街 (Sumner Street) に居たことがわかる。

<sup>26</sup> “I am not quite sure whether I shall return or not. I am going to complete my book, have the Chinese characters set up in China and send over here after which I may return if I have a good appointment. It will depend on my circumstances.” (Interview).

<sup>27</sup> 鄭光寧『鄭氏譜乘』、民國六十六年、香港：篁齋圖書室刊、200頁による。ただしこの書は編纂物であり、典據が示されておらず、明かな誤りも散見するので、確實とはいえないが、張之洞に招聘されたことは恐らく事實であろう。また上掲「聚龍村名人鄭其照」によれば、歸國後、邵筱川に随って洋務や通商に従事したのち、光緒十一年（1885）に廣東に招聘されたとする。歸國後いきなり張之洞に招かれたとするよりも、ある程度の人脈が出来てから、その傳手で廣東に行ったと考えるのがより自然で、落ち着きがよいように思われる。鄭其照が光緒十年には上海に居たであろうことを支持するのは、王韜が『英語彙腋』初集に寄せた序文の末尾に「光緒十年歲次甲申五月上澣長洲王韜序於淞北寄廬」と署していることである。王韜はこの年、二十年以上に及ぶ避難生活を切り上げようやく上海に歸っていた。鄭其照は上海で王韜に直接會つて序文を索めたものであろう。『弢園文録外編』卷十一「潘孺人傳略」に「光緒十年歲次甲申季夏三月下澣、余方還自粵東、小住春申浦上、養疴杜門」とある（季夏は季春の誤りか？）。

中國新聞事業の歴史には常に特筆大書されている。その記念すべき創刊號は同年の五月二十三日發行であり、主筆には吳大猷、林翰瀛が任じた。廣州以外にも廣東省内各地および上海、梧州、さらには香港、澳門からシンガポール、ヴェトナム、サンフランシスコ、フィリッピンなどに販路を擴げたが、光緒十七年（1891）に至り、掲載記事が總督李瀚章の怒りに觸れ停刊に追い込まれることになった<sup>28</sup>。そのため鄭其照たちは新聞社を租界である沙面に移し、外國人の名義で『中西日報』として發行を繼續した。その後も紙名變更など幾らかの紆餘曲折を経ながら1900年頃まで繼續されたようだが<sup>29</sup>、鄭其照が最後までその經營に攜わったかについては明かではない<sup>30</sup>。鄭其照は廣州では芳村の聚龍村<sup>31</sup>に住んだ。聚龍村は光緒五年（1879）に臺山の鄭氏一族が移り住んだ村落で、清代の民居のスタイルを今に伝える建築群として、廣州市の「文物保護單位」となっている。それら民居のうち三、四、十一號樓は鄭其照が自分で設計して建てたもので、四號樓が彼の故居だという<sup>32</sup>。現地の言い傳えに基づくもので、とりあえずは信用しておくしかあるまい。残念ながら鄭其照の終焉の地も、正確な卒年も不明であるが、他地に遷ったという情報もないとすれば、聚龍村の自邸で逝去したものと考えるのが妥當であろう<sup>33</sup>。

## 二、著作

鄭其照は1868年、三十二歳の時に『字典集成』を編纂したのをはじめ、その改訂第三版を1887年に送り出すまでの約二十年間、もっぱら英語の辭書、學習書の編述に従事している。清末の英語學界でこれほどの貢獻をした人物を他に見いだすことは難しい。以下にそれら英語學に関わる著作を中心として、鄭其照の著作について概観してみたい。

---

<sup>28</sup> 吳灞陵「廣東之新聞事業」、廣東文物展覽會編印『廣東文物』（民國三十年、香港：中國文化協進會刊行）下冊、卷八「人文藝術門」所收、758-9頁。

<sup>29</sup> 方漢奇主編『中國新聞事業通史』第一卷、1992年、中國人民大學出版社、485頁。

<sup>30</sup> 鄭其照が清朝のシンガポール駐在商務領事や駐米商務參贊助理などの職に就いたとする説があるが、典據が示されていないのでここには採用しなかった。赫明義「文字密林中的身影・鄭其照與《華英字典集成》」[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4a20fefc010008j8.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4a20fefc010008j8.html) もしこれらを鄭其照の閱歷中に懸けるとすれば、すくなくとも駐シンガポール商務領事はその最晩年に置くしかないとされる。駐米商務參贊助理はアメリカに居た時分のことであろうか。

<sup>31</sup> 現在の廣州市荔灣區衝口涌にある。

<sup>32</sup> 「聚龍村名人鄭其照」に據る。但し鄭其照の設計及び建築を1879年のこととしているのは聚龍村の開村年と混同したものであろう。1879年といえば鄭其照はまだアメリカに居たころである。したがって、これらの民居が彼の設計になるとしても、その建築年代は彼が廣州に落ちて以降のことではなければならない。

<sup>33</sup> 「聚龍村名人鄭其照」は民國初年に病沒したとする。

甲：『字典集成』同治戊辰年鐫、粵東鄭全福選著 *An English and Chinese Lexicon compiled in part from those of Morrison, Medhurst and Williams*, by Kwong Tsün Fuk. Printed by De Souza & Co., 1968.

後に何度も改訂増補される鄭其照の辞典の初版本である。日本国内では唯一お茶の水図書館所蔵本が知られている<sup>34</sup>。この初版本はまず著者名が鄭全福 (Kwong Tsün Fuk) となっていること、また英文書名が Dictionary でなく、Lexicon を用いていることが後の改訂版と異なっている。中文書名は封面に「字典集成」の四字が記されているのみで、「華英」の二字がない。封面に「華英」が冠されるのは第三版以降のようであるが、実際には鄭其照自身は具名を「華英字典集成」と考えていたようで、第二版の自序にも「余曩刻華英字典集成一書」と言っていることから分かる。ここでは區別に便利なので、この二字を加えないこととした。また鄭其照はこの当時全福と名乗っていたようだが、その後この名が使用されることはまったくない。

本文 326 頁、それに「雑字」「粵東俗字註解」「華英句語」を附載する。第一の「雑字」は天文に始まり外國官に終わる、一種の分類體漢英語彙である。附録の第二は、最後の「華英句語」をはじめ、「雑字」や字典本文にも粵東の俗字（俗語）が用いられているので、他省の利用者にはさぞかし不便であろうというので、その粵語語彙を解説したものである。最後の「華英句語」というのは問答文例集である。鄭其照は当初から実践的な英語教材編纂を目指していたことが分かる。これらの附録はその後の改訂版でも大幅に増補されて残っている。ところで明治初年にウィリアムス（衛三畏、S. Wells Williams、1812-1884）やロブシャイトの華英辞書を訓譯出版したことで名を残している柳澤信大（退藏）は、この辞書の附録「粵東俗字註解」に基づき、それを改編和譯して、明治三年に『粵東俗字便蒙解』の小冊子を刊行した<sup>35</sup>。奇しくもこれが日本に於ける粵語關係著作の最初のものとなっている。

鄭其照の英語學著作

	刊行 年	中文書名	英文書名	自序の日付
甲	1868	字典集成	An English and Chinese Lexicon	缺
乙	1875	字典集成	An English and Chinese Dictionary	1875. 05. 29
丙	1881	英文成語字典	A Dictionary of English Phrases	1880. 12. 24

<sup>34</sup> 管見によれば、国外ではオーストラリアのミッチェル・ライブラリ (Mitchell Library, a section of the State Library of New South Wales) に一部存在する。ただし未見。

<sup>35</sup> 明治三年 (1870) 九月官許、松莊館藏梓、東京書林岡田屋嘉七發兌。

丁	1885	英語彙腋初集	The First Conversation-Book	1881. 10. 20
戊	1885	英語彙腋二集	The Second Conversation-Book	1881. 10. 20
己	1885	應酬寶笈	Manual of correspondence and social usages	1882. 01. 21
庚	1885	英學初階	First Reading-Book	1882. 08. 01
辛	1887	華英字典集成	An English and Chinese Dictionary	1882. 11. 24

この辞書はすでに指摘されているように<sup>36</sup>、主としてメダーストの英漢辞書に依拠したものであるが、表題にあるとおりモリソン（馬禮遜、Robert Morrison、1782-1834）、ウィリアムスも利用されているようだ。

乙：『字典集成』光緒元年重鐫、粵東鄭其照選著 *An English and Chinese Dictionary compiled from Different Authors, and Enlarged by the Addition of the Last Four Parts*, by Kwong Ki Chiu. Hong Kong: The Chinese Printing and Published Company, 1975.

鄭其照の辞書の第二版である。先に觸れたようにこの辞書は第三回の留學生をアメリカに送り届け、その後イギリスを経て歸國した後、第四回の留學生引率に出発するまでの慌ただしい中で出版したものである。短い漢文の自序が着いており、その日付は「光緒元年端陽節」である。これは西曆に換算すると5月29日に当たる。

本文344頁、附録として（一）雑字撮要（Part I: The most important words selected from miscellaneous topics）, viii+152pp. ; （二）語言文字合璧（Part II: Words, sentences, notes, bills, letters, petitions etc.）, 126+103pp. ; （三）水程輪路記略（Part III: The distances by land and water between the principal parts in China and different other countries etc.）, 14pp. ; （四）中外年表（Part IV: The Chinese chronological tables reduced according to the standard of the christian eras.）, 21pp. （五）貨物税則（Part V: Tariff of imports and exports of China.）, 27pp. が附いている。ちなみに附録（四）の題簽には乙亥六月とあるから、出版は早くとも六月以降であったことが知られる。自序に改訂のあらましを述べて「其上段之字典畧爲増減、中段之雑字添入甚多、竝廣輯語言文字之要者刻於後」とあり、字典本文の増補は多くない一方、附録は大幅に擴充されており、貿易實務に役立つような項目が付け加えられているのが注目される。

<sup>36</sup> 上掲の内田論文7-8頁、宮田論文31-33頁。

鄭其照がアメリカに着いた頃、上海の英字新聞ノース・チャイナ・デイリー・ニュース（字林西報、*North-China Daily News*）にこの辭書の書評が掲載された<sup>37</sup>。書評では附録の「雑字」が廣東音を用いていることを指摘しつつ、外國人が中國語を學習する際にも役立ち得ることを述べるとともに、とりわけ他の附録の有用性が評價されている。また最後に、中國國內で中國人學者による英語の知識増進のための努力を目にし得ることは、中國に於ける今後の知識向上の良き前兆であるという。

この辭書は刊行の四年後、光緒五年（1879）に上海の點石齋から石印で縮小影印され、更に日本でも明治十四年（1881）に點石齋石印本を用いた永峰秀樹による訓譯本が出現した<sup>38</sup>。初版に比べるとその影響はかなり大きいといえる。

丙：『英文成語字典』*A Dictionary of English Phrases with Illustrative Sentences. To which are added some English proverbs, and a selection of Chinese proverbs and maxims; a few quotations, words, and phrases, from the Latin and French languages; a chronological list of the Chinese dynasties, harmonized with the chronology of Western nations and accompanied with an historical account of the rise and fall of the different dynasties; and short biographical sketches of Confucius and of Jesus.* By Kwong Ki Chiu, late a member of the Chinese Educational Mission in the United States, and Compiler of an English and Chinese Dictionary. A. S. Barnes & Co., 1881.

ニューヨークで出版されたこの辭書には中文題名が見られない。ここに掲げた「英文成語字典」という書名は、鄭其照の他の著作に附された廣告によったものだが、彼自身による命名と考えてよいと思われる。

本文 794 頁の後に附録と索引が付き、全部で 915 頁の大冊である。鄭其照は自序の中でこの辭書の編纂経緯を語っている。自分がこれまで出版した辭書では英語の熟語を採録しているにもかかわらず、定義が不十分で、また用例を缺いていた。それを補うためにウェブスターをはじめ主要な辭書を参照したが、適当な材料を得られないので、中國人の英語學習者のため英語の成語を解説する單獨の著作を刊行することにしたという。ここにいう成語とは熟語の意味だが、収録語数は約六千。各項目に鄭其照がその滯米期間中に苦心して収集した用例が掲出されている。熟語それぞれに使用頻度に應じた (a) (b) (c) のランク付けを行い、學習者の便宜を圖っているが、これは他の著作にも見られる鄭其照の實用性追求の精神の一つの現れである。

<sup>37</sup> *North-China Daily News*, Oct. 7th, 1875 (New Series, Vol. XVI., No. 3488), p. 399.

<sup>38</sup> 上掲内田論文 7 頁、宮田論文 36-37 頁。

タイトルページにも明示されるように、本文の後には、英語のことわざ、中国のことわざと格言、ラテン語・フランス語由来の慣用語の説明が付き、さらに「中外年表」「孔子聖蹟年譜撮要」「耶蘇事蹟年譜撮要」が附載されている。この辞書は主として（中国人を含めた）外国人の英語学習者のために編纂されたものだが、英語辞書の歴史においても新分野を開拓したものとして高く評価されている。鄭其照は本書の出版に当たって、イェールやハーバードの學長など當代アメリカにおける著名な學者、教育者に推薦辭を書いてもらっていて、その數合計十七通、すべて辞書の前後に掲載されている<sup>39</sup>。推薦辭である以上當然とはいえ、概ねすべて高い評價である。慣用語と俗語とのあいだの境界が明確でないのが惜まれるというような批評もあるが、一方で英語國民にとっても自らの言語の特質を知る上で極めて有用であり、こういった書物が一外国人の手によって物されたことは特筆すべきだという讚辭も見える。英語辞書として一新機軸を打ち出した本書は、日本でも多くの讀者を得たようで、日本語版が存在するほか<sup>40</sup>、翻刻本も出版されている<sup>41</sup>。ただし明治二十一年、ディクソン（James Main Dixon、1856-1933）の『英語熟語辞典』*Dictionary of idiomatic English phrases : specially designed for the use of Japanese students*が出現すると<sup>42</sup>、そちらに押され勝ちであったらしい。この辞書は英語國民に今でも多少の有用性があると見えて、1970年代にアメリカで復刻再刊されている。

ともあれこの著作は鄭其照がアメリカ滞在中に心血を注いだ作物であり、彼の英語力の水準を最も雄辯に物語るものである。おそらくは清末の英語學において屹立する成果といえよう。ただし中国人の英語學習の上でどれほどの寄與があったかはまた別の問題である<sup>43</sup>。

丁：『英語彙腋初集』 *The First Conversation-Book, containing common and simple words wrought into illustrative sentences, classified and accented …… designed for use in schools.* By Kwong Ki Chiu, Shanghai: Wah Cheung, Kelly & Walsh. London: Trübner & Co. Yokohama: Kelly & Co. Hong Kong: Kelly & Walsh. San Francisco: Wing Fung., 1885.

戊：『英語彙腋二集』 *The Second Conversation-Book, containing a section on aids to reading; an illustrated list of important and special words;*

---

<sup>39</sup> 最後の三通（日付は1881年の2月及び3月）は、印刷に間に合わなかったと見え、他の十一通が巻頭に置かれてあるのと異なり、最終頁（915頁）に回されている。

<sup>40</sup> 増田藤之助校訂編纂附譯『英和雙解熟語大辭彙』東京：英學新誌社、1899年。

<sup>41</sup> 東京：國民英學會刊、明治34年（1901）以降版を重ねた。

<sup>42</sup> 東京：共益商社書店。

<sup>43</sup> 上引の高永偉「鄭其照和他の《英語短語詞典》」も英語辞書編纂史上の意義を強調する。

*also, extended conversations on one hundred and eighty-nine familiar practical subjects, …… etc., etc. designed for use in schools.* By Kwong Ki Chiu. 1885.

この二書は同じく會話教本で、刊行時期、發行書肆などすべて同一なので、一括して取り上げることにしたい。鄭其照自身も二集の自序で「余作英語彙腋二集、蓋與初集遞續而互成、相連而竝貫者也」というように、本來一連のものである。1881年に上記『成語字典』を上梓した鄭其照は、すかさず中國人のための英語學習書のシリーズ(Kwong's educational series)に取りかかった。まず出來上がったのがこの二冊である。もっともこのシリーズの諸書はすべて鄭其照歸國後の1885年に一括して出版されているので、完成の前後関係は自序の日付に據らざるを得ないが、それに従えば先ずこの二種が出來たと考えられるのである(上掲の表を参照)。初集に王韜の序文<sup>44</sup>が付いていることは上にも觸れたが、そこに「英語彙腋有初集、二集、三集、由淺以及深、由粗以逮精、由略以至詳」と言い、また鄭其照の初集凡例にも「此書全套共分三卷」とあるので、もとは三集まで出す計畫であつたらしいが、これは實現しなかつた。

初、二集ともまず中文で鄭其照の自序と凡例を出し、次いで英文の自序と目次が續く。初集は xxxi+247 頁、七部 (section) 構成で、二百五十六課 (lesson) から成っている。二集のほうは xv+406 頁、十部、二百十三課である。使用されている單語は初集で八千餘、二集では七百六十五語が新たに用いられているという。學習法は、子供が口傳てに言語を學ぶのと同じく、自然に話し言葉を會得することを主眼とする。喋れるようになれば、文法も分かるので、何も英語の難しい書物を澤山讀むには及ばない、というのがその主張である。またアクセントの位置を明示したり、音節の切れ目が分かるようハイフンで區切ったり、さらに常用語は太字で印刷したりなど、様々な工夫が凝らされている<sup>45</sup>。

本書に用いられた中國語は新聞などに使用されるやや文語的なもので、方言でも官話でもないから、中國語を學ぼうとする英國人にも役立つだろうと、凡例にいう<sup>46</sup>。また中國人同様、日本人の英語學習にも使うことが可能だと、抜け

---

<sup>44</sup> 王韜「英語彙腋序」はまた『弢園文錄外編』卷十二にも見えるが、字句に若干の異同がある。北京：中華書局、1959年刊、310-311頁。

<sup>45</sup> この工夫は本人も得意だったとみえ、バンククロフトのインタビューの際にも、わざわざそれを見せている。“Each word is accented you see. (showing)” (Interview).

<sup>46</sup> 英文序文中に以下のような對應箇所がある：“The Chinese which is made use of in these books is not the colloquial nor the mandarin language, but such as appears in newspapers. It is, therefore, a common and easily understood form of the language. For this reason the books will be useful to Englishmen who wish to acquire Chinese.”

目なく宣傳に勤めている<sup>47</sup>。前者は鄭其照の『字書』の初版及び改訂二版が粵音を採用していることに對する批判を意識しての改良であろうし、後者は『字書』第二版が日本で翻譯されていることを知った上での發言に違いない。

實際、この書物は英語の口語學習書として非常に組織的且つ完備したものである。この教科書で眞面目に學習すれば相當高度の會話力が身につくであろうことが豫想される。ただ本書は英文タイトルに示されているように、學校での使用を前提としているが (designed for use in schools)、どれほどの學校がこの書物を採用したかはよく分からない。もともと鄭其照は留學生の豫備教育に關與したことからすれば、同じような學校における使用を期待したものかもしれないが、幼童出洋の事業は出版時すでに廢止されていた。

關連して今ひとつ注意されるのは、このシリーズすべての著作にわたって、凡例末尾に「是書會領有英美各國牌照、無論中外國地方、凡有翻刻者必加追究」として權利を主張している點である。これはいかにも鄭其照が歐米の制度によく通じた洋務の専門家であつたことを窺わせるとともに、版權の主張がこのシリーズの流布をかえって妨げることにもなつたのではないかと思われる<sup>48</sup>。

己：『應酬寶笈』 *Manual of correspondence and social usages : containing instruction and examples in all branches of letter-writing, forms of business-papers: to which are added sections on punctuation and the use of capitals: with some pages on grammar and spelling, and a chapter on the Chinese method of reckoning time: specially adapted to self-instruction.* By Kwong Ki Chiu, Shanghai: Wah Cheung, Kelly & Walsh. London: Trübner & Co. Yokohama: Kelly & Co. Hong Kong: Kelly & Walsh. San Francisco: Wing Fung., 1885.

本書はシリーズ中のいわば應用編である。書翰文例をはじめとして、領收書などの商用書式、さらには名刺の形式など、實務に攜わるものの必攜參考書として編まれた。贈答品に付けるカードの例はともかく、墓碑銘のサンプルまであるのには驚かされるが、何か種本として使つた書物に含まれていたものであろう。また評點符號の使用法や、助動詞、接尾辭の説明も見えている。xxii+276

---

<sup>47</sup> 同前：“It is also proper to state that these books will serve the Japanese equally well with the Chinese, in their study of English.”

<sup>48</sup> ちなみにこれら鄭其照の著作の賣價を知る上で恰好の材料が『彙腋二集』の末尾に見るので、それをここに紹介しておきたい。それは「鄭其照華英書籍減價發售」と題された廣告で、次のようになっている：『華英字典』每部銀伍員正、『應酬寶笈』每部銀壹員七角、『英文成語字典』每部銀四員五角、『英語彙腋初集』每部銀壹員三角、『英語彙腋二集』每部銀壹員七角、『英學初階』每部銀陸角。香港永樂街利昌隆、上海拋球場華彰號全啟。

頁。『英語彙腋初集』の凡例中に「此書全套著成後、余又同時續出二書以備學者所需覽。一爲『地球説略』、載天下各國輿圖、區宇所聚、坎坷所通、靡不詳記。一爲『應酬寶笈』、內載書啓稟帖格式、吉凶儀禮等類、於學英文者最關急務」とあるものの後者である。同時に刊行豫定とある『地球説略』は結局出版されずに終わったらしい。常に實用を旨とする鄭其照の様々な工夫は、すでに『字書』の附録に見られたところだが、本書はまさにその最も実用的な知識をまとめたものであり、その意味でよく鄭其照の特徴が発揮された作物ということが言える。

庚：『英學初階』*First Reading-Book illustrated with cuts*. By Kwong Ki Chiu., Shanghai: Wah Cheung, Kelly & Walsh. London: Trübner & Co. Yokohama: Kelly & Co. Hong Kong: Kelly & Walsh. San Francisco: Wing Fung., 1885.

x+162 頁で、八十九課からなる。英語を読むための初級教本であるが、本書でも『英語彙腋』同様に、アクセントの明示、音節の区切りが行われていることは当然である。著者はかつて英國で出版された初級讀本を翻譯して、英漢對照の書物をこしらえてみたが、意に滿たないうえ、面白さに缺ける嫌いがあつた。それに挿繪がない。そこで本書の出版を思い立ったのだが、内容も興味深いものを吟味したうえ、ほとんど總ての課に銅板の挿繪を附けたことで、ほぼ目的に適ったものが出來あがつたという<sup>49</sup>。漢文の序文にはまた「此書之成、不惜鉅費、將天下各方物產可供採覽者、務雕鐫其模像」ともあり、銅版挿繪の制作には相當の經費を要したことが窺われる。これらの挿繪は、小は一、二センチの動物から、大は一頁全部を占める場面まで、その數全部で八十四ある。自序の日付を見ると、本書の完成がシリーズ中で最後になっているのは、これら挿繪の調製に時間を要したためであろう。

凡例に「凡學者當從此卷讀畢後、隨讀『英語彙腋』『地球略説』等書」とあり、本書がまず最初に學ぶべき教科書と位置づけられていたことがわかる。ただ本書は『彙腋』と同じく、今日あまり現存していないことからすれば、それほど盛行を見たものとも思われぬ。これは編者の鄭其照にとっても意外のことであつたと思われる。

辛：『華英字典集成』*An English and Chinese Dictionary. Compiled from the latest and best authorities and containing all words in common use, with many examples of their use*. New edition, throughout revised, and greatly enlarged and improved……. By Kwong Ki Chiu. Shanghai: Wah Cheung, Kelly

<sup>49</sup> 『英學初階』序、中英文ともほぼ同内容。

& Walsh. London: Trübner & Co. Yokohama: Kelly & Co. Hong Kong: Kelly & Walsh. San Francisco: Wing Fung., 1887.

自序の書かれた日付は1882年で、鄭其照がまだアメリカに居た頃である。上で見たように、自序の脱稿後しばらくして、鄭其照はバンクロフトのインタビューに應じている。その時にはすでにあらかたの原稿は出来上がり、製版のために中国に送ってあったが、なお改訂を續けていたらしい<sup>50</sup>。今回の改訂はかなり大幅なもので、鄭其照のアメリカ滞在八年の研究と経験の結實したものであった。これまでの粵音は姿を消し、文語的表現に取り替えられているのは、上に『彙腋』で見たのと同じ理由からである。それは本書の序文（英文）にも「英語の翻譯には、當然ながら特定の方言ではなく、簡潔にして容易に理解される中國語を用いた」と明確に断つてある<sup>51</sup>。鄭其照の努力の甲斐あって、この第三版『字典』は非常な歓迎を受けたようで、後に多くの再印本が出現している<sup>52</sup>。ただし封面や序文は第三版のものがそのまま套用されている。管見に入ったものでは一九二三年香港和盛印務局承印（Printed by Wo Shing Printing Office）という版がもっとも新しいが、さらに後の版もあるかも知れない。

以上が鄭其照の英語學著作のすべてである。鄭其照の著作としては他に『地球五大洲全圖』があり<sup>53</sup>、また『小方壺齋輿地叢鈔』に収められる「五大洲輿地戸口産表」一卷及び「臺灣番社考」一卷が知られているに過ぎない。「五大洲輿地戸口産表」というのは『地球五大洲全圖』と何らかの關連があると思われ、あるいは地圖に附載された表そのものではないかとも思われるが、未だ確認し得ていない。「臺灣番社考」はおそらく清佛戰爭の最中、フランス艦隊の臺灣封鎖によって、臺灣問題が急遽クローズアップされたころの作物であろう。廣東に矛先を向けつつあった佛軍に對抗する兩廣総督張之洞の幕中に鄭其照は居た。

---

<sup>50</sup> “Now I am revising.” (Interview).

<sup>51</sup> “It should be stated that in translating the English, the simple and easily understood form of Chinese, has been employed, in preference to any particular dialect, for obvious reasons.”

<sup>52</sup> 上掲の内田論文及び宮田論文には、二種の1887年刊本、循環日報社1899年刊本、同1902年刊本などが紹介されている。ただし二種の1887年刊本というのは、一本が本来の1887年刊本であるに違いなく、増訂のあるほうは刊年を明記しないで、後の増訂本の一種と考えるべきであろう。

<sup>53</sup> 『輿圖要録』1997年、北京圖書館出版社、3頁、0019號。「地球五大洲全圖 鄭其照繪、光緒元年刻印本、未注比例。一幅、彩色、80.5x97厘米。附五大洲各國人口清冊、各國丁方道里表、各國土産紀要、五大洲水運路程道里表、輪船路里程表等。圖中簡要地繪出世界五大洲輪廓及主要山脈、河流走向。」

## 小結

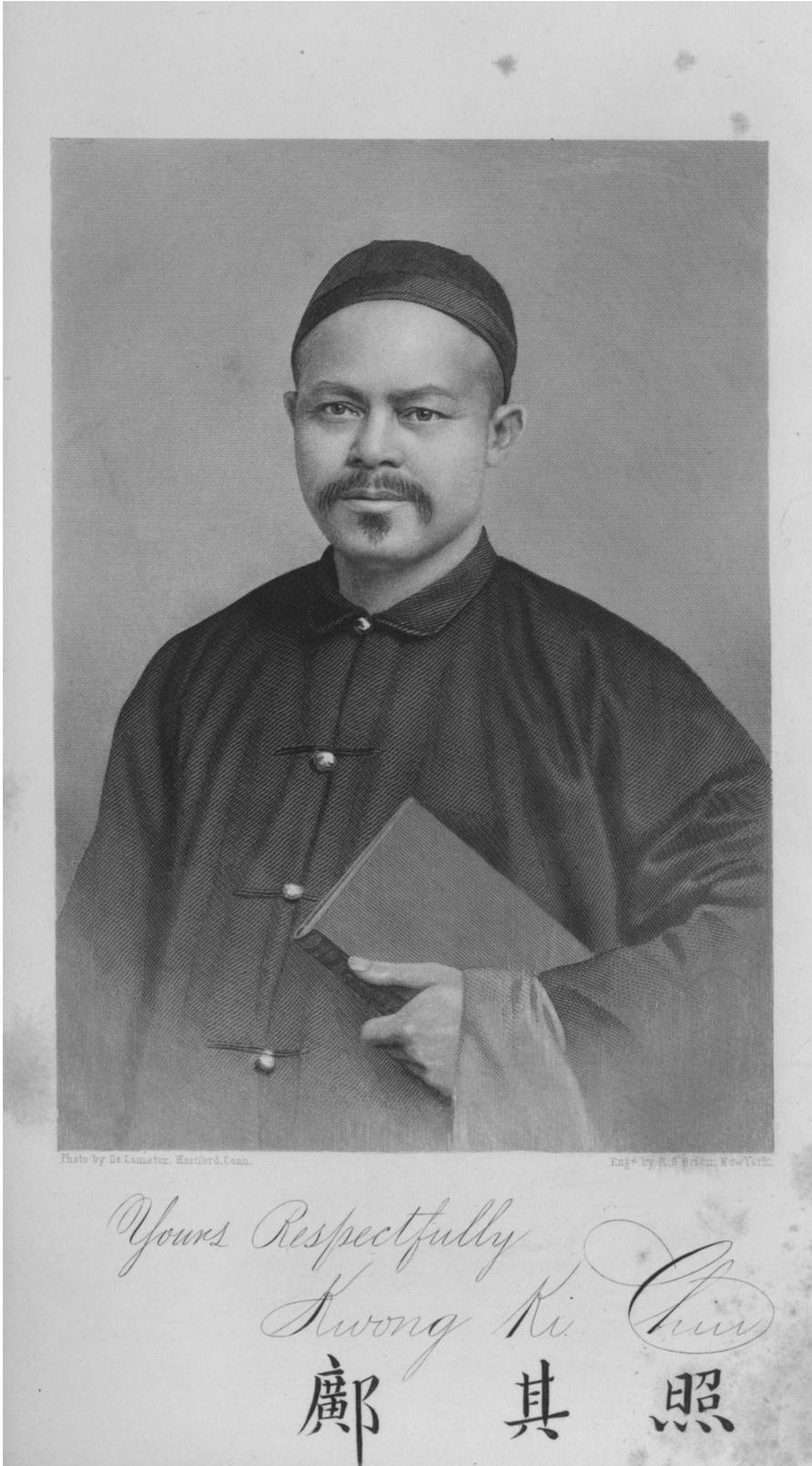
清朝の中國が英語を知らなかったわけではない。乾隆年間に會同四譯館で編纂された、いわゆる新華夷譯語<sup>54</sup>には、英語のみならず、蘭、佛、獨、伊、葡、羅典などの語彙集が、中國邊境の少数民族語とならんで収録されている。この一事はまことに象徴的である。ここではこれらヨーロッパ諸語は正しく華夷思想に基づく、數多ある邊夷の言語のサンプルとしてとり上げられたものに過ぎない。しかし清末開國後の中國にとって、英語は新しい國際關係の中で生存していくための不可缺の道具となった。そして新しい英語學の建設には全く新しい人材を必要とした。その役割を主體的に擔おうとしたのが鄭其照である。

咸豐年間の『華英通語』や『英話註解』、同治年間の『英語集全』『英字入門』などはともかく、光緒年間に入って作られた『英文舉隅』『英字指南』などの書物と比較しても、鄭其照の著作はその清新さと周到さにおいて他を壓倒する水準をもっていたことは間違いない。鄭其照以前の書物は、英語といっても正則の英語ではなくピジンであったり、また單なる英米の教本の翻譯に過ぎないものであった。鄭其照の英語學著作はそれらとは一線を劃し、独自の編集方針に基づき、數々の新機軸を驅使した成果であって、まさしく清末の英語學史に屹立していると言っても過言ではない。それだけに『字典』はともかく、一連の語學書が必ずしも十分に活用されなかったのは惜しまれてならない。鄭其照が清末英語學に果たした貢獻はもっと高く評價されて然るべきである。

[附記]小文を脱稿後、近刊の鈴木智夫『近代中國と西洋國際社會』（東京：汲古書院、2007年刊）を見ることが出来た。その第二章「清朝政府による官費アメリカ留學生派遣事業の研究」は、祁兆熙『游美洲日記』を用いた詳細な研究で、鄭其照についても言及がある（93-95頁の注23）。特に鄭其照がアメリカに渡航する前、上海に居た時期については筆者の管見に入らなかった材料が用いられており、参考とすべき點が多い。就いて参照されたい。

---

<sup>54</sup> 故宮博物院所藏鈔本。英語は「[口英]20E04 咭喇國譯語」二巻で、他の西洋語が各五巻であるのに比べて短く、誤りも多いという。カトリック宣教師に英人のいなかったことが影響しているのであろう。Walter Fuchs, Remarks on a new “Hua-i-i-yu”, *Bulletin of the Catholic University of Peking*, No. 8, Dec. 1931, pp. 91-101. 鴛淵一・村上嘉實譯「新華夷譯語について」『史林』第17巻第2號、昭和七年四月、288-295頁。また現況を報告する馮蒸「“華夷譯語”調査記」『文物』1981年第2期を参照。



鄭其照（1836-?）の肖像：Hartfordで撮影、New Yorkで銅版にしたもの。